
大人の恋愛短編集。

ヨシノ和巴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大人の恋愛短編集。

【Nコード】

N1754C

【作者名】

ヨシノ和巴

【あらすじ】

様々な恋愛の形を様々な筆致で。甘酸っぱい青春の恋からラブレスな大人の関係まで、多種多様。読み切り恋愛SS集。

ガラス細工のシンデレラ

息苦しい。

最初の感想はそんなものだった。

何の感慨もなく

「ああこんなものなのか」と軽い失望も覚えた。

執拗に絡み付いてくるざらついた感触にも何も思わなかった。
不快にすら思わなかった。

ああ、こんなものか。

なんて味気ない。こんなものが。

そうか、そうなんだ。

別に何か期待していたわけでもないけれど私の中で一つの幻想が終わりを告げた。

甘酸っぱい恋も、情熱的な愛も、嘘っぱちだ。

薄い薄い硝子の板で作られた、美しくて脆弱なシンデレラの靴。
履くことの出来ない甘い夢。なんてくだらない。

「どうする？」

かすかに掠れた声で、彼は問いかけるといった体裁をとりながら口調で続きを催促した。

つまりその次に行われるべき行為を、だ。

「好きにして」

間違っではないない。

嘘はついていない。もう好きにしてくれればいい。

壊したいなら壊してくれ、もうどうにでもなれ。

他人から見れば自暴自棄、そうかもしれない。
それすらどうでもいいのだ、ああ。
情けない。

顔を上げれば男の目が見えた。

貪欲な獣の目。淫靡な色に染まって濡れている。

本能を剥き出しにして、体中で欲を渴望して。

紳士的な皮を一枚剥がせば、なんて醜い。

さようなら、私。

さあ、まぶたを閉じて、その先は。

昼休みに君と。

朝から降っていた雨は昼になってようやく晴れた。
水たまりの中の小さな青空を白い飛行機がすうつと横切っていく。

この窓際の席は、外が見られて退屈しない。
雨がやんだ途端に校庭に走り出てきて、サッカーをしている生徒たち。

職員室の外でぼんやり煙草を吸ってる先生は、授業中より老けてみえた。

掃除のおばさんはせつせと花壇の水やりをしてる。
雨、降ったばかりなのに。

ね、やっぱり退屈しない。

それに何よりここからはあの人が見える。
校庭の隅っこの名前の分からない大きな木の下でうずくまってる、あの人。

あんなとこじゃ雨宿りできないこと、私は知ってる。大きい割に葉が少ないのだ、あの木は。

たいして丈夫でもなくせに、というか風邪ばかりひいてるくせに、くだらないやせ我慢しちゃって、馬鹿なやつ。

後で風邪ひく位ならおとなしく教室入ればいいのに。
ほんと意地っ張りなんだから。
しょうがないなあ。

しょうがないから、お弁当を食べ終わったら迎えに行こう。

それで二人で先生に謝って、教室に戻ってこよう。
意地っ張りなあの子は謝るのが下手だから私も一緒に謝ってあげよう。

意地っ張りでその上照れ屋なあの子は、多分嫌がるだろうけどそんなことは私に関係ない。

だってあの子が風邪をひいたら、毎日毎日プリントを届けるのは私だもの。

テスト前の大事なときにそんなことになったら迷惑極まりない。

自分が悪いんだから、せいぜい恥ずかしがればいいんだ。少しは懲りるかもしれない。

嫌がるあの子の顔を思い浮かべたら、何故だか笑えた。

そして最後の一口を口に押し込んで、私は席を立った。

ピター

不意に閉じたままの視界が眩しくなった。

微かに目を開けると、ベッドの近くの電気スタンドが煌々と自己主張をしている。

そういえばタイマーで明かりが灯るようになっておいたんだって、と思ひ出すと同時に段々と思考がはつきりとしてくる。

ゆっくりと体を起こし傍らを見やると、程よく筋肉のついた背中が規則正しく微かに波打っていた。そうつと正面を覗き込めば何より大切な恋人は子供ののような寝顔で小さな寝息をたてている。

起きる気配は全くない。

私はそれだけ確認すると、ゆっくりと、音をたてないよう静かにベッドから降り、手早く服を身につけた。

今日は早く片付けなきゃならない仕事があるのだ。こんなときにくぐに帰るだなんて慌ただしすぎてムードも何もあつたものではないが、流石にそんなこともいっていられない。

何か一言言ってから帰った方がいいのだろうか。

一瞬そんなことが頭をよぎったが、直後それはできないと思ひ直す。

彼の安眠を妨害するのは本意ではないし、何より今彼と顔をあわせたとしてどんな顔をすればいいのかもわからない。

何も言わずに此処を出るのは少し気が引けるのも事実だったが、結

同書き置きだけ残して帰ることにした。

出る前に一度だけ部屋を振り返る。

少しけばけばしく感じる装飾品や色が剥がれかけた壁紙、汚れで微かに曇った窓。

けして趣味がいいとは言えないこの部屋から出るのが妙に寂しかった。

名残惜しい気持というものはとても苦くてそれでも少しだけ甘い。

徐々に動き出した街を曇った窓越しに見ながらふとそんなことを思う。

太陽がようやく昇ろうとしていた。

親友

気まづい沈黙が私たちを包んだ。

放課後の屋上には、私と佳奈しかない。

佳奈は自慢の長い髪をふわりと風に靡かせフェンスにもたれながら空を見上げた。

相変わらず美少女だ。

ぱっちりした二重の目に、すつと通った鼻筋、ニキビ一つない白い肌、ちよつと尖った神経質そうな顎、ほっそりとした長い手足。全部、私と正反対。

私は色黒だし、目は一重だし、少し横に潰れた丸顔で、鼻ぺちゃで、顔には吹き出物がちらほら、挙げ句チビで短足。

「まさか、智世子も紀村君のこと好きだったなんてなあ……気がつかなかった」

佳奈は小さな溜め息をついた。

気がつかなくて当たり前だ、隠してたんだから。

「私だって、佳奈が紀村君のこと好きだなんて知らなかった」

私は小さく呟いて、俯いた。

佳奈が紀村君のこと好きだなんて、神様も意地悪だ。

佳奈と私じゃ格が違う。佳奈になんて勝てっこない。

紀村君だって、そりゃあ可愛い子の方がいいに決まってる。

佳奈は性格だっていいし、あたしなんか、あたしなんか……。

「参ったな」

佳奈はずるずると座り込み、髪をかきあげた。柔らかそうな髪がさらさらと佳奈の指からこぼれる。

「ほんと、参っちゃった」

そう繰り返して、佳奈は目を瞑った。

眠り姫みたいな綺麗な顔。

佳奈は何にも参ることなんてない。

私取るべき道は一つで佳奈が取るべき道も一つ。つまり、私が身を引き、佳奈が紀村君に告白する。

きっと紀村君はOKするだろうから、それでめでたしめでたし、だ。「佳奈は何にも参ることないじゃん、私のこと気にしないで紀村君に告りなよ。佳奈ならきっとOK貰えるって」

私は佳奈の隣に座った。

佳奈の目は見ない。真っ直ぐ前を向いたままだ。

「……言ってる意味がわかんない」

「だから」

「馬鹿じゃないの！！ アンタって何でそんな大馬鹿なのよ！！」

いきなり怒鳴られ、私は呆然とする。

なんだ、分かってんじゃん。ちゃんと。

佳奈は大きく肩で息をしながら、目を潤ませていた。美少女は怒っても美少女なんだな、とぼんやり思った。

「アンタだつて紀村君のこと好きなくせに馬鹿なこと言わないですよ！ 何よ、それ。あたし、あたしは……」

続きは言葉にならなかった。

佳奈の大きな目から大粒の涙が溢れて、洪水になった。ひつくひつくと噺り泣く佳奈の背中を慌ててさすりながら、私は言った。

「ごめん、佳奈」

「謝らないでよ、みつともないじゃない」

くぐもった声で佳奈は返事をした。

ああ。そうだった。

本当にいい子なんだ、この子は。

優しく弱くて強がりだ。

私が一番知っていたじゃないか。

「ごめん」

「だから、謝らないでっば」

「本当に、ごめん。ごめんなさい……」

何を謝っているんだか分かってなかったのに、私はただそう繰り返した。

何故だか無性に悲しくなって悔しくなって佳奈の背にしがみついて、思い切り泣いていた。

想うより他に望みはない(前書き)

同性愛

想うより他に望みはしない

好きだとか、愛してるとか、そんな陳腐な言葉を並べ立てても何の答えも見つかからない。

そういった言葉は、世の女性を喜ばせる為の決まり文句のようなものだ。

つまり、今の俺には必要のない台詞。

俺が気になっている人物は男なのだから。

この歳になるまで、同性に恋愛感情を覚えたことなんて、これっぽっちもなかった。

高校時代、クラスには女みたいに綺麗な顔の男子もいたが、そういうやつにだってちっともなんともなかったのだ。

女遊びだって、していないとは言いつてもいい。いや、どちらかと言うと結構遊んでいる方だろう。

異性に興味がなかったわけでも、同性に興味があつたわけでもなかったし、今だって言い訳のようにとれるのかもしれないが、自分はそういう類の人間ではないように思うのだ。

今自分が抱いている感情もそれが恋愛感情なのか、はっきりとはわからない。

もしかしたらそれは、ただの友情の延長線にあるのかもしれないし、そうでないのかもしれない。

その境目はひどく曖昧で、自分でもはっきりと線を引くことは出来ない。

今自分ではっきりと分かっている事は、それこそ好きだとか愛してるだとかそういうパターン化されたようなものにはおよそ当ては

まらないものだ、ということだけ。

ただそれだけだった。そしてこれからも自分にはこれ以上のことは分らないのだろう。なんとなくそう確信していた。

だから、考えるのはやめにしよう。何度そう決めたかしのれないが、今度こそ、もうやめにしよう。

ああだこうだと考えたって、答えなど出るはずもないのだ。

それに、この想いを伝える気もない。伝える言葉も、伝えられるだけの勇氣も持ち合わせていない。

きっとこんなことを伝えても彼は困るだけだろう。

彼は優しすぎるほどに優しいから、悩ませてしまっだろう。

清んだ瞳を曇らせて、考え込んでしまっだろう。

そんなことは望まない。

あの笑顔を近くで、今のところ一番近くで見たいというだけで充分だから。

唯一無二の親友という今のポジションも、それなりに気に入っている。

たとえ伝えられなくても、想っただけならどれだけだっただダだよな、そう自嘲気味に呟いて目を閉じる。

まぶたの裏にぼんやりと、いつもの優しい笑顔が見えた。

置いてきぼり

女の子らしい、丸っこくて読みやすい字でびっしりと書きこまれたノート。

色とりどりのペンでマークして、先生の無駄話まで書き込まれている、可愛らしいチェックの表紙のノート。

やはりテスト前は早紀のノートを借りるのが一番だ。見やすいし、授業を聞いていなくてもこれを読めばだいたい理解できる。

半分以上は写し終わったものの、全て写し終えるまでにはまだまだ時間がかかるだろう。

後何ページ位あるのだろう、ふと思ってノートをパラパラとめくってみた。

1、2、3……と、順に数えていた手をとめる。

中に挟まれた1枚の紙。

プリント、だろうか？

けれど、これは厚紙みたいだし、厚紙のプリントなんて貰った覚えがない。

怪訝に思いながら裏返すと、下手くそな字で書かれたシンプルなお8つの言葉が目に入った。

付き合ってください

見てはいけないものを見てしまったような気がして、私はパタンとノートを閉じた。

そういえば早紀、私に貸す前にも誰かに貸していたんだっけ。

確か、隣のクラスの……そう、間宮とかいう男子。がっしりした体格で、柔道部の部長か何かだったはずだ。

そうか、間宮が。

私はくるくると鉛筆を回した。

別に間宮のことが好きなのでもないので何となく気に入らない。男子に告白された早紀に妬いているのだろうか、私は。

ううん、違う。きつと逆だ。

なんだか、早紀が遠くに行ってしまう気がするのだ。

毎日、馬鹿話をしてわいわいやっている今の日常が、遠くなる気がする。

よく分からないけど、そんな気がした。

私はもう一度ノートを開いた。多分、早紀はまだこの手紙を見ていないだろう。

8文字だけが書かれた厚紙を抜いて、ぐしゃりと握りつぶした。

ぐしゃぐしゃになった紙屑はゴミ箱に捨てて、またノートを写しはじめた。

ほっとしたような、情けないような、よく分からない気持ち私の中で渦を巻いている。

それに気付かないふりをして、私はノートに書かれた文字にだけ意識を集中させることにした。

けもの(前書き)

そこはかとなくエロです。
15禁です。

けもの

熱い吐息が耳元を掠めた。

深く繋がった結合部から淫猥な水音が聞こえた。

どろどろに溶けた肉を抉られるような、不思議な感覚。

快感とも、痛みとも呼べる、わけのわからないそれに嬌声をあげながら、頭は冷え切っていた。

……違う、まだ足りない。

もっと深く、強く交わりたい。

こんなんじゃない。

全然足りない。

これは人がするセックスだ。

私が欲しいのは、もっと単純で、生臭くて、本能的なセックスだ。獣の交わりが欲しい。

人はもう、ヒトでなくなってしまった。

人は今や動物であることを放棄した。

文明や言葉によって装飾された世界を造り、そして人はパーツになっ
ていく。

世界や歴史のパーツになることを選んだくせに、今を生きることを
放棄したくせに、人は生きる意味を知りたがる。

今日も昨日も、明日ですら過去へ繋がるひとつのピースでしかない

のだというのに。

完成することのない巨大なパズル、世界を作り上げる為のピース。生きるのも死ぬのも、全てピースの柄にしかならない。

しかし、それが何だと言うのだろうか？

獣は己がパーツやピースであることを知らない。

彼らには今という一瞬しかない。

思い出にひたり、過去を取り出すなどということはしないのだ。

未来を憂えて溜め息をつくことなどないのだ。

嗚呼、なんて浅はかで愚かで気高いのだろう。

獣に、なりたい。

食べて交わって産んで育て、それを繰り返して、やがて死ぬ。

単純で難しく、でも本来かくあるべきという、偽りや虚構に惑わされない姿。

獣に、なりたい。

獣に、戻りたい。

そう思いながら、私はまた快樂に溺れるふりをした。

後悔という名の自己嫌悪

刹那、時間が止まったように感じた。

「別れよう」

残酷な響きを伴ったそれは、私の頭をがんと容赦なく殴りつける。

何で？

言いかけた言葉は音にならなかった。

私は、彼の顔をぼかんと見つめる。

冗談でしょ、と笑い飛ばすには、彼はあまりに真剣な表情をしていた。

見慣れた顔なのに、まるで知らない人のように見える。

「そうだね」

するり。唇が勝手に言葉を紡いだ。

待って、今私、何て……？

いつもと変わらない調子で、私の知らない私がしゃべり続ける。

「私たち、何だかんだもう2年目だし。もうそろそろ飽きてきたよねー」

ねえ、何言ってるの？

ねえ、私ってば。何言ってるのよ？

待ってよ、待って。

駄目。待てない、止まらない。

違うよ、私が言いたいことはそうじゃないのに。

「そうそう。こんだけ一緒にいたら上等だよなあ。つか、よかったよ。何か文句言われんじやないかとか、結構ビクビクだったんだけどさ。お前も俺と一緒にだったんだな……。んじゃ、そういうことだから俺帰るわ」

彼はからからと笑った。

いつもと同じ笑顔で笑って、ひらひら手を振りながら来た道に戻っていった。

私を、置いて。

何で？

言いたいこと、言えてないじゃん。

私、またやっちゃったんだ。

素直になれなくて、結局思ってることが言えない。最後までこんなんだなんて。

バカ、バカバカバカ。

言えばよかった。

何でって。私の何が駄目だったのって。

未練がましくても、今も好きなこと伝えればよかった。

嫌いにならないでって、言えたらよかったのに。

今更、涙出てくる位なら。

言えば、よかったのに。

何でよ、バカ。

海に重ねて君を想う

彼の匂いは、海の其れに似ていた。

湿った風は私の髪を揺らす。

素足から直に伝わる海辺の砂の感触は、じつとりと濡れて気持ち悪かった。

全てがまとわりくような海の気配は、どうしても彼を思い出させる。

彼と居た過去を思い出せば、喧嘩をして泣いたことばかりが浮かんだ。

幸せや喜びよりも、憤りやもどかしさの方が、多分大きかった。

私は彼を愛していたのじゃない。

愛じゃなかったのだ、あれは。

悲しいくらいに間違いなく、私は彼を愛してはいなかった。

思い出の中の二人は決して幸せじゃなかったのだ。

酒に酔った彼につけられた傷は、数え切れない程に多い。

右腕には、生白い一筋の跡がまだ残っている。彼が暴れてガラスを叩き割ったときに切ったものだ。

彼は、血を見た途端に哀れなくらい狼狽えて、私にすがりついてきた。

見捨てないでくれ、俺が悪かった、もうしない。愛してるんだ、だから、なあ見捨てないでくれよ。

何度となく耳にした言葉だ。

そして私はいつも彼を赦した。

赦すほか無かった。

私は彼を諫めたり突き放すことが出来るほど大人じゃなかったのだ。それに、愛してはいなかったけれど、彼のことが好きだった。

ごつごつとした指も、辛い煙草の味がするキスも、照れたときに肩をすくめる仕草も、抱きしめられると感じる潮っぽい汗の匂いも全て。

全て、好きだった。

あの気持は間違いじゃなかった。

けれど今なら言える。

私たちは、釈然としない何かを誤魔化す為に甘えていたのだと。生きていくもどかしさや、在り続けることの気だるさ、そういうどうしようもない何かから逃れる為に、私たちは恋に逃げたんだ。

頬をゆつくりと伝う滴は、きっと海の其れと変わりはしないだろう。辛くはない。

認めることは、虚しさと冷たさを纏いながらも私に赦しを与えてくれるから。

大丈夫、今なら前へ進める。

私が今日零した感情が、明日には海へ溶けてしまえばいい。優しい色へ変わってしまえばいい。

一步にも満たない前進だけれど、また前へ進める。

思い切り息を吸い込んだら、やっぱり彼に似た匂いがして、少しだけ鼻がツンとした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1754c/>

大人の恋愛短編集。

2010年10月20日13時30分発行